

都道府県番号	31
都道府県名	鳥取県

()
 該当する観点にチェックをすること

・学校名及び規模

鳥取市立城北小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	4	4	3	3	3	3	1	21	32	
児童数	93	105	89	89	86	105	3	570		

・実践研究の概要

・主題(テーマ)

確かな力を持ち 生き生きと学ぶ 子どもの育成

・テーマ設定の趣旨

戦後最大の教育改革とされる2002年度、そのスタートにおいて教育界は内外から「学力低下」の批判を浴びている。その先の主なものは、新学習指導要領における学習内容の削減や学校週5日制における授業時間の削減である。しかし、それだけではなく、産業界や最高学府である大学側からも、近年の義務教育期における学習内容の習得状況に多くの懸念が投げかけられている。その骨子は、「知識が不足している」「技能が身につけていない」「考える力が不足している」「創造性が足りない」「学習(探求)意欲が不足している」などである。つまり、受け取りようによっては、新学習指導要領及び学校週5日制に対する辛辣な意見は、その新しい制度そのものに当たったのではなく、その背景は、教育の中心である学校教育における、この10-20年間の営みに対する批判だったのではないだろうか。

そのような状況のもと、本校城北小学校の子どもたちの様子を見ても、先にあげた問題点と同じようなことが言える。特別な、又は、個別な特徴が、それほどあるというわけではない。

なお、本校は、ここ数年は、体育、総合的な学習の時間の活動を中心に研究に励んできた。さらには、平成元年施行の学習指導要領のもと、その趣旨をそれぞれが理解し、真剣に児童の指導に当たってきたところであるが、近年の本校の教育活動を振り返ってみると、次のような反省があげられる。

問題解決能力を高めるためには、問題解決的な学習だけでよかったのだろうか！

児童の主体性を尊重するあまり、基礎基本と言われる部分の学習が欠けてはいなかっただろうか！

支援という言葉に影響を受けすぎて、鍛えるということを軽視しすぎてはいなかっただろうか！

思考力や判断力を重視するあまり、知識や理解を軽視しすぎてはいなかっただろうか！

この分析は、「問題解決能力」「児童の主体性」「支援」「思考力や判断力」の育成に問題があるのではなく、(もちろん、それらは非常に大切なものである)それらを「過ぎた」状態で取り込んできたことに対する素直な反省である。

つまり、今一度、教育の原点に立ち返り、子どもたちに「必要な力」をつけるべき効果的な方法を考えてみようと思うわけである。また、本年度よりスタートした学習指導要領の趣旨を考慮し、研究テーマを「確かな力を持ち、生き生きと学ぶ子どもの育成」とした。「確かな力」が意味するものは、子どもたちがこれからの社会をよりよく生きていくために必要な力(=生きる力)であり、「生き生きと」には、はつらつとし、はちきれんばかりの意欲と向上心をもって成長してほしいという願いを込めている。

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫(研究テーマ、実践方法等の共通理解など、配慮した点など)

国語・算数という基礎・基本を考える際に最も重要となるであろう教科を2つ研究教科にした。

教科部会と学年部会という2つの側面から、研究に当たることができるようにした。

各自が自分でテーマを持ち、年間を通して、研究を積み上げる体制とした。

日々の実践を尊重し、その積み上げが研究の成果となるよう共通理解をしたこと。

() 実践研究の内容

パワーアップタイムの充実に関する取り組み

毎日3校時のはじめに10分間を設定(10時30分~40分)

プリントを中心とした反復練習の時間

ステップアッププリントの作成とその活用に関する取り組み

漢字・計算の練習のためのプリント [夏休み学習帳の作成]

評価がもたらす授業改善について

本校においては、本格的な評価についての研究は、来年度が本番であると考えている。しかし、来年度、研究を進めるためには、本年度中に、全単元の評価規準表を作成・使用し、見通しや課題を整理しておかなくてはならない。その程度の取り組みではあるが、本年度、評価について研究をしてきて、次のようなことを感じている。

評価項目を精選することは、授業のねらいを明確化する。

- ・ 本来は、授業のねらいが先にあって、それに対する指導、そして、評価という関係にあるのだろうが、評価のことを念頭において、指導計画などを考えると、その方法及び、ねらいが一層明確になることを体験した。そのことは、児童にとっては、「わかる授業」「できる授業」となったようだ。
- ・ 評価を積み重ねると、その子のつまずきの内容が分かってくる。つまずきの内容がはっきりすると、個別の指導法を考案することができる。さらには、事前につまずきの予想ができるようになり、授業に際して配慮しながら指導することができるようになる。この繰り返しで、ポイントをはずさない授業づくりにつながるようだ。

今年度の評価に関する研究を踏まえて、来年度の実施しなくてはならない研究のポイント

評価規準表及び評価計画、評価シートを改善すること。

- ・ B規準に達しない児童への手立ての方法
- ・ A規準の明確化
- ・ 評価方法及び評価場面の明確化

研究授業を通して、複数教師による同一児童に対する評価事例の検討をすること。

記述形式の評価の簡便な方法を考案すること。

有効な自己評価、相互評価など方法を考案すること。

評価シート、記述評価、自己評価、相互評価の関連の図り方を検討すること。

評価規準の保護者公開が促す家庭の教育観の変化を調査すること。

評価をもとにして、多様な指導の手立てを工夫・考案すること。

() 成果と課題

- ・ 基礎学力の充実を図ってきたために、学習に取り組む児童の態度が落ち着いてきた。特に低学年における聞く態度や学習に取り組む態度の向上が顕著である。
- ・ 繰り返し学習を多く取り入れたことで、自分でめあてを持ちながら取り組む学習において、意欲が高まってきた。特に、中学年においては、自分の学習状況を自己評価しながら取り組める子が増えてきた。
- ・ 音声言語による伝え合う力の育成を国語を中心としながらも様々な場面で取り入れてきたことにより、自分の考えや思いを、個性的に表現できる児童が高学年を中心に増えてきた。
- ・ 市販テストをもとにした4月からの単元ごとの得点推移からは、学力の向上が見受けられる。

() 成果の普及方策

ホームページ上で公開予定

<http://www.torikyo.ed.jp/johoku-e/>

() その他(その他、特色ある取り組みがある場合に記入) などを記述